ポセイドンを殺せ！

堀田和貞

創林社

ポセイドンを殺せ！

堀田和貞

創林社

【著者略歴】

堀田　和貞（ほりた　かずさだ）

1955年北海道旭川市生まれ。

帯広畜産大学、卒業。

現在、建築物ねずみこん虫等防除業、防除作業監督者。

現住所＝〒229 神奈川県相模原市若松１－５－27

著書『絶対楽観者』(1984年，自費出版 300部)

ポセイドンを殺せ！

昭和60年８月30日発行　　自費出版300部

著者　堀田　和貞

制作　㈱創林社

東京都千代田区三崎町2-12-2

汝、自らの手によって

汝、自身を取り戻せ

1

それまでの僕は無意識だったのかもしれない。あるいは現実だったのだろうか。それを確かめることはできないだろう。あえて確かめようとするならば、水レンズで覗くような感じを覚悟しなければならない。それも焦点を合わせようとして、合わせることのできないもどかしさを感じながら……。それはぼんやりとかすんだ記憶をよりどころとしなければならない。だが、すでに記憶は確かであるか、はっきりとはしない。それでもじれったさを押さえつけ、根気と忍耐を同時に生じさせ、あたかももつれてからみあった糸玉をほどくように、精神を落ちつけよう。しかしなんといってもたまらないのは、ふつふつと湧きでる自己嫌悪に耐えなければならないということだった。それは不快だった。それでもその中から断片的な記憶が、ふと頭に浮かぶことがある。だが、それは現実かどうかわからないというのが本心だろう。

もはや、僕にとっては現実ほど非現実なものはないのであるから……。現在の僕に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とって、いや、とにかく今としての僕にとって、それはたいした問題ではなかった。非現実なる世界もそれ自体、不合理であるからだ。しかしそのことはおそらく現実ほど不合理ともいえまい。どっちにしろたいしたかわりはないだろうから……。

しかしそう納得しても心にひっかかることは、どうして僕がこの世界に放りこまれていたのかということだ。それさえわかれば、僕は満足だ。今となっては、現実に戻りたいなどという狂気じみた考えもないのだから……。

あれは確か突然に起きたはずである。なぜかというと、こうして考えていても、突然以前の記憶がどうしても思いだせないからである。いや、突然以前の記憶などないのかもしれない。それまでの僕は無だったのかもしれない。

自分の記憶のもっとも古いものを呼びこんでも、それ以前の記憶などない。記憶のない僕は存在していたのだろうか。とにかく、僕は突然に存在していたのではあるまいか。あたかも突然が僕の意識を作動させたかのように……。

いずれにせよ、どうしても突然である。それ以外のなにものでもない。それまでの

ことなどしらないのだから……。

突然はあたかもなにかの前ぶれかのような余韻をともなっていた。それは夢から目覚めるかのようであった。目覚める瞬間は実に哲学的興味があるものだ。夢の中の現実が、ふとした心境のうちに、現実の中の夢になる。そこに行くまでの心境の移り変わりは、考えれば考えるほど不思議という他あるまい。

目覚めた瞬間に、それまでどんな夢を見ていたのか、思いだそうとして思いだせない、あのもどかしさを感じながら、僕は気がついたのである。……その時すでに僕はここにいたのである。

目覚めたときには、あるいはそれとなく気がついたときには、すでに僕は不合理のなかにいた。思いだそうとして、思いだせそうにない、まだるっこさを感じさせるのは、どうやら現実のほうかもしれない。だがこの世界にいて現実とは何かと考えると、現実がますます存在しないのではないかと思えてくるから不思議である。いや、現実こそ非現実そのものだったのではあるまいか。僕がここにいるのは、あるいは現実かもしれない。いや、現実ではないと断言することもできないだろう。なぜなら、

これは僕が現実で見ている夢かもしれないのだから。見ている夢が確かであるなら、現実にあることになるだろうから。

とにかく、それまでの僕は無意識だったのかもしれない……。

突然、僕は暗黒のなかにいた。それを感知したのが、そもそものはじまりだった。いつもの僕ならば、「僕はどうしてここにいるんだろう……」、と多少なりとも考えめぐらせていたはずである。あるいはこういう状況だからこそ、なおさら「僕はどうしてここにいるんだろう……」、と考えるのが当然だったのではあるまいか。あの現実とやらにいたときは、ここが現実と知りつつも、少々哲学めいた心境で、自己の存在というものを考えていたではないか。どうして僕はここにいるのだろうかと……。ところが、今はどうだ。いざそのときがきたというときには、そんなことは全然、気にもかけなかったではないか。

突然、暗黒にいるのを知覚したときの僕の心境は、見事というほどの御粗末なものだった。あまりにもバカバカしかった。どうしてここにいるのかという哲学的重大問

題も、ある種の方向音痴的な違和感のまえには完全に敗北していた。おかしなものだが、僕は寝相を悪くして、頭が変な方向に向いているのではないか、と思えたぐらいであった。

瞬間的にこの世界にすべり落ちた僕の心境は、あっけなかったというほかあるまい。存在などという問題は、よほどの知識人か、あるいはよほどの暇人が問題にするものではなかろうかと、そのときはじめて知ったしだいである。とにかくそのときの僕は方向音痴だった。頭が変な方に向いているのではないかと何故だかそう感じていた。はっきりしない意識のまま僕は頭の向きを周りの状況で判断しようとしていたらしいのである。だが、まったくの暗黒は僕を完全に包みこみ、そのときから僕はどうしてここにいるのか、わからなくなってしまったのである。

次の瞬間、スーッと心が肉体から離れだして行く妙に心の落ちつかぬ、不快感を味わっていた。どうやら、僕は、落下しているらしい。あたかも崖から飛び降りたら、こんな感じではないかと思いながら……。もはや僕の意識は落下しかなかった。落ち

て行く肉体と、浮きたつような心のアンバランスも感じながら、頭の片隅を一瞬よぎった考えは、これは夢ではないかということだった。

そういえばまえにもこんなことを感じたことがあった。それは一度ならず何度もあった。目のまえに落とし穴があって、なんとなく落ちこみ、胸が縮みこまるような落下現象……、そうだ、夢の中と同じだ。

少々活動的になった意識が、今の状態もまさにそれだと告げると、僕はすでに夢の中にいると思っていた。一瞬にして、夢と悟ったというほうがあたっているだろう。

……そうだ、僕は夢を見ているんだ。

だが、落下して行くのにはきりがなかった。僕は永遠に落下して行くのではあるまいか。僕の意識があるかぎり。

どこまでも、どこまでも……

ひょっとしたら宇宙の果てまでかもしれない。

僕は、落ちる……

まだ、落ちて行く……

まだ……、まだ……

どこまでも……、どこまでも……

僕は落ちて行く……

しかし僕はこの意識の断絶する瞬間を知っていた。やはりそれも突然だった。あるいは落下しながら考えていたのかもしれない。いや、感じていたのかもしれない。それは飛び降り自殺の心境ではあるまいか。なぜか、ふとそんな気がしていた。

数十メートルの高所から身を投げ、地面まで激突するまでの瞬間、自殺者の脳裡には死ぬ瞬間が永遠に感じ、過ぎ去りし映像を見ているのかもしれない。それは聴覚ならば子守唄に相当する、視覚の物語かもしれない。誕生から死までの影絵だろうか。あるいは、いままで経験したことのない、もっとも醒めた僕として、現実に浸っているのかもしれない。

いずれにしろこういう状況のなかで、弥次馬が登場していたらどうであろうか。自殺者はすでにバカバカしい現実にみきりをつけ、拒否して、最後の任務を遂行してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。自殺が人間に残された最後の自由などとは思わないが、意を決して飛び降りたとしよう。べつにだいそれた決意ではないかもしれないが、その結果それまで経験したことのない空間に入り、一秒一秒が生彩に脳裡に焼きつくことだろう。頭脳は落下という刺激により、かつて使われることのなかった領域が作動し……、人生の影絵もすべて見あわり……、はじめて客観的に今の自分を見たとしたら……、その時、周囲に気を配ると弥次馬の顔、顔、顔が目に入る。どの弥次馬も間抜けで、せっかくの人生の終幕にふさわしくない顔をしていたとしたら、どうだろう……。たとえば落語にでてくる与太郎のように口を大きくあけて、よだれをたらしている顔だったら！　一大決心をして現実から去ろうとした気高い者が阿呆の見世物になっていると気がついたらどうであろうか。死んでも死にきれないかもしれない。だが、すでに遅し。一瞬で幕は降りるのだから。幕は突然に降りる。突然の瞬間まで自分はバカだと感じながら……。それを救うのは突然の意識の断絶だろうか。

突然、幕は降りた。

宇宙の果てまで落下して行く意識が突然に断絶して、気がつくと薄暗い部屋で仰向けに横たわっている気がしていた。全身に何かが巻きついているようだった。どうやら包帯でぐるぐる巻きになっているらしい。鼻は病院特有の消毒臭を感じていた。目を開けているのか、閉じているのか、判然としなかった。もし開けているとしたら、包帯の隙間からぼんやりと光がもぐりこんでいるのを感じているのかもしれない。締めつけられた肺は大きく広がらずに、少量の空気しかうけつけず、息苦しさを感じさせた。肉体は感じるときには鉛のように重ったるく、意識して動かそうとすれば、その意識はどうすれば肉体が操縦できるのかを忘れてしまっていた。ただ、ミイラのようにいるだけで、生きているのか死んでいるのか、わからなかった。いつまでもこのままでいる精神状態も限度にきていた。いてもたってもいられないもどかしさを感じつつも、やはり同じままでいるしかなかった。規格化されたような身動きのできない焦りを全身に感じた。だがそれは肉体的感覚ではなく、精神的感覚だった。

もはや僕の肉体など、邪魔以外のなにものでもなかったのだ。精神はそんな肉体から飛びだそうともがき苦しんでいた。しかしどうしても飛びだせずにいた。念じて

も、念じても、精神は肉体にとりつかまり、徒労に終わった。疲れ果てているなかにも、頭の片隅には非常に醒めた部分があったのかもしれない。いつの間にか意識は、はじめはかすかに、そして次第に大きく、醒めた部分に流れこんでいた。

ドキ、……ドキ、ドキ……

ドキ……

……ドキ、ドキ、ドキ

鼓動だろうか。それとともに首筋の血管が太くなり、細くなりしているようだった。

ドキ、ドキ、ドキ……

ドキ、ドキ、ドキ……

ドキ、ドキ、ドキ……

内部音は秒針のような気もした。それに合致するかのように、意識は目覚めつつ、活動するのを待っていた。どうして僕がここにいるのかわかるはずもないが、どうやら怪我をして、ここに運ばれてきたのかもしれない。ひょっとしたら、僕は飛び降り

自殺を図ったのだろうか……？

その瞬間、脳裡の片隅に阿呆の間抜けな顔が浮かんでいた。死なずによかったと思う反面、死ねなかった自分の運命のバカさかげんにあきれていた。鼻と口になにやらチューブがもぐりこんでいる圧迫感を感じつつ、どうしてこうなったのか考えた。

本当に自殺しようとしたのだろうか……

どうもはっきりしない。頭の中を探査するかのように、脳細胞の一つひとつに問いかけるかのように自問したがわからなかった。あきらめかけた僕はひとつの結論めいたものを得ていた。

どうやら、僕は、記憶がないようだ。

僕はそのままずっといた。いや、そうしているほかなかった。同じ意識の流れのままに、永遠にこのままずっといるような気もする。しかしどうしたことか、一瞬のなかにいる気もしていた。もはや永遠も一瞬もなかった。いや、時間も空間も問題にするほどのものではなかったのだ。

ミイラのままに僕はこの時、生まれてはじめてのおかしさを味わった。それは不思

議なあつけないおかしさだった。心に湧きだつ生きづいた生命のように、笑いは勝手に反動した。押さえても、押さえても、湧きだしてきた。

時間と空間は僕の人生を占めた重大問題ではなかったか？

時間と空間のなかで、僕は必死に求めていたではないか。バカバカしい人生から抜けだそうと、周囲の無味乾燥な者からでようとしていたではないか。あんなに僕は焦っていたではないか。惰性をいやがり、惰性から逃げようと決心したではないか。

だが、考えてみると、それはいつの間にか惰性となっていたのかもしれない。脇目も見ずに、時間と空間での最適な座標系の場を占めようとした結果、どうだ。惰性に走っていたのだ。いまはどうだ。このミイラでは！

あははは、もはや、……、そうだ、あははは……、無意味だ。あははは……、無意味なんだ！　時間も空間も問題にするほどのことではなかったのだ！

いままでの求めていた座標系など必要としないのだ。それを求めようとした僕は一種の病的症状の発現だったのではないだろうか。いまの僕にとって、そんなことの

いっさいは、たいした問題ではなかった。僕の立場ではすべては幻にすぎなかった。ようするに何の役にもたたないのだ。それなのに何故に僕は血まなこになっていたのだろう。それこそ、非現実ではないか！　妙なものだ。いままでの僕はどうかしていたのではないだろうか。それまでの僕は……

僕に対する思いが静まったとき、哀れな僕にとって唯一の感覚は鼓動だった。頭に響く内部音、ドキ、ドキ、ドキ……、僕の意識は、ドキ、ドキ、ドキ……、それがすべてを語るかのように、ドキ、ドキ、ドキ……、響く、ドキ、ドキ、ドキ……、それしか聞こえない、ドキ、ドキ、ドキ……、意識が、ドキ、ドキ、ドキ、だぶってるぞ、ドキ、ドキ、ドキ、？、ドキ、現実？、ドキ、意識が何かに触れている！？　ドキ、ドキ、ドキ……

僕はぼんやりと意識の回復を感じていたのかもしれない。ただ、でく人形のような僕に意識は何かを告げようとしていたのだろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com